







# 心に残るひとこと

発達教育学部教授 田中 純

映画「ボヘミアンラプソディー」、最後の場面、舞台から超満員の客席を撮ったアングルの中で彼の歌を聴いて不覚にも静かに号泣してしまいました。私自身、客席の大小は様々ですが、幾度も経験してきたシチュエーションです。一瞬走馬灯の如く色々な思いが頭をよぎったのでしょうか。小学2年の時、純少年は初めてのピアノ発表会で大失敗をやらされました。それ以来、元々気弱で小心者の彼は、毎年の発表会が近づいてくるとお腹が痛くなってきて人生？が嫌になっていました。

一方、野球少年だった彼は、その不安を打ち消すべく毎日のように野球に没頭していました。ピアノを始めた頃は天才だ！と一部でうわさされていたのですが、この最初の失敗によりピアノはあまり好きではなかったようです。しかし、男の気持ちをおかしてくださった先生は、彼を暖かく見守り、後に彼の歌の才能を見出し、歌のレッスンを始めました。その先生は、彼が小学6年になった時、大阪のフェスティバルホールに連れていき、生の素晴らしい音楽を聴かせ、「純、そろそろ本気になったらどうや？」

「無意味なことばでつづられた 千万言の詩よりも こころしずまる一言が はるかにとうとう美しい」〔法句経101〕  
私は、前述のように小心者で物事に対して積極的ではありませんでした。今の私があるのは、これまでお世話になった恩師の折々のひとことのおかげだと確信しています。将来の道を決めた少年は、音楽家でもあった音楽の先生がいらっしゃる高校に入学してしましました。本当は野球をしたかったのですが、丸坊主になるのがいやだったことと（今なら全く問題ないのに）、音楽の道を選んだ理由でコーラス部に所属しました。最初は、変声期が終わったばかりのか弱い声でみんなに紛れて歌っていました。3年生になる前に先生に呼ばれ、「純、指揮者になってくれ！」。人前で話すのが苦手な彼に指導なんてできるはずはありません。「指揮者になるなら、コーラス部を辞めま

す!!」と何度も断り続けた彼。しかし、先生は許してくれませんでした。「純、お前しかいない！」翌年の合唱祭で指揮をした彼が、審査員に絶賛されたことを付け加えておきます。  
東京の大学に合格した彼は、その大学で一番有名な教授を希望したのですが、無名の彼は（当然ですが）、受け持ってもらえませんでした。しかしその教授が、声楽の試験の後、廊下ですれ違った時にすつと振り向いてひとこと、「歌、よかったですよ。そのひとことが、どれほど自信になり、彼の心にすつと残っていることか。数年後、その教授は、留学後の彼の歌を聴いた後にも、彼に賞賛の電話を突然かけたのでした。「……です。上手くいったね。」

乗った彼は、ドイツに渡ります。まだまだ未熟だった彼は、ドイツの音楽大学の教授に厳しく指導されます。やはり気弱な彼は、どんな声が出なくなり、落ち込んでいきます。「こんなことでは、大変な思いをして僕を留学させてくれた両親に申し訳ない」と珍しく考え、別の音楽大学の教授のところへ突然押しかけ、レッスンをお願いしたのです。彼の切羽詰まった必死の願いを受け入れてくれたその教授が、何度目のレッスンの際のひとこと、「もつとおおらかに！」。細かいことに気を遣いながら窮屈そうに歌っていた彼にとつとどれほどの重みがあったか。単純な言葉だけれど、その場の場面で影響力のある言葉は確かに存在します。その後、彼は、水を得た魚のように伸び伸びと歌うようになったのは言うまでもありません。ある時その教授は、「オペラのオーディションを受けてきなさい。」オペラが嫌いでオペラをする気がなかった実行力のない彼を半ば強制的に送り出し、合格させたのです。そのオペラ公演のため一ヶ月間、ドイツのある街で日本人1人外国人に混じって過ごしたのは、気弱な彼を少しだけ成長させたようです。

《戦いの場で 百万の敵にうち勝つ 人よりも自己にうち勝つ その人がまことに真の勝利者よ》〔法句経103〕  
音楽は、戦いではありませんが、時々勘違いする人がいます。人より上手になりたい。こう思うのは大間違いです。自分自身でしかありません。独自の音楽表現をする以外ありません。その時に私のように弱い部分が多くある場合、それを克服つまり自己にうち勝つことが大切です。音楽の場合、勝利者ではなく、真の表現者と置き換えましょう。私の場合は、当然ですが一人で打ち勝つことはできないようです。恩師のひとことがあつてこそ、その言葉に触発され、自身を見つめ、反省し少しだけ努力してこれまで生きてこられた気がします。

今年の前半、コロナ禍による給食の停止で余ってしまった牛乳をたくさん消費するレシピとして、日本では古く飛鳥時代から食べられていた「蘇」が話題になりました。美味しくて栄養たっぷりという評判の蘇ですが、仏典の譬えには、この蘇を超えた究極の食べ物が登場します。それが醍醐です。牛乳を精製していくと酪→生蘇→熟蘇と変化し、最終的に醍醐ができます。この醍醐は最高の美味かつ万病を癒やす最高の薬とされ、仏法の中の最高の教えの代名詞になりました。浄土真宗では、阿彌陀仏の教えが醍醐に譬えられます。煩惱の病があまりに重く、他の仏法では救われない悪人が、完全なさとりを開くことのできる教え。これを親鸞聖人は「本願醍醐の妙薬」と表現しています。

大学の卒業後、調子に乗った彼は、ドイツに渡ります。まだまだ未熟だった彼は、ドイツの音楽大学の教授に厳しく指導されます。やはり気弱な彼は、どんな声が出なくなり、落ち込んでいきます。「こんなことでは、大変な思いをして僕を留学させてくれた両親に申し訳ない」と珍しく考え、別の音楽大学の教授のところへ突然押しかけ、レッスンをお願いしたのです。彼の切羽詰まった必死の願いを受け入れてくれたその教授が、何度目のレッスンの際のひとこと、「もつとおおらかに！」。細かいことに気を遣いながら窮屈そうに歌っていた彼にとつとどれほどの重みがあったか。単純な言葉だけれど、その場の場面で影響力のある言葉は確かに存在します。その後、彼は、水を得た魚のように伸び伸びと歌うようになったのは言うまでもありません。ある時その教授は、「オペラのオーディションを受けてきなさい。」オペラが嫌いでオペラをする気がなかった実行力のない彼を半ば強制的に送り出し、合格させたのです。そのオペラ公演のため一ヶ月間、ドイツのある街で日本人1人外国人に混じって過ごしたのは、気弱な彼を少しだけ成長させたようです。

《戦いの場で 百万の敵にうち勝つ 人よりも自己にうち勝つ その人がまことに真の勝利者よ》〔法句経103〕  
音楽は、戦いではありませんが、時々勘違いする人がいます。人より上手になりたい。こう思うのは大間違いです。自分自身でしかありません。独自の音楽表現をする以外ありません。その時に私のように弱い部分が多くある場合、それを克服つまり自己にうち勝つことが大切です。音楽の場合、勝利者ではなく、真の表現者と置き換えましょう。私の場合は、当然ですが一人で打ち勝つことはできないようです。恩師のひとことがあつてこそ、その言葉に触発され、自身を見つめ、反省し少しだけ努力してこれまで生きてこられた気がします。

帰国後、純はあるオペラ作曲家と知り合い、また調子に乗ってオペラ出演を承諾します。何故か、オペラ嫌いの彼が、承諾したかという、ドイツのある演出家のひとこと、自分にもオペラができるかもしれないと思っただけです。「楽譜に忠実にそして言葉をしっかりと感じて歌ってください。そうすれば自然に身体が動きます。」しかし、ドイツ音楽の研究と表現だけを探究してきた彼にとつと日本語のそれも仏陀を演じるなんて無謀ですね。案の定、その作曲家に何度も指摘されました。「今、何を考えてた？」日本人なのに日本語で歌うことに慣れていなかった彼にとつとやはりその

時の歌は、言葉を伝える力がなかったのでしょうか。このオペラの何度かの上演で彼の言葉を伝える力が増していったのは間違いありません。  
ある演奏会で彼が、数々の童謡、合唱曲で有名な作曲家の前で歌う機会に恵まれました。その数日後、なんとその作曲家からFAXで次々と歌曲が送られてきたのです。「作曲したのでは是非、歌ってください。」「僕のために曲を？」とそれほど嬉しかったか。確か彼は、その時飛び上がった喜びでいました。その後、その作曲家と何度も共演をし、音楽家、表現者、そして人としての姿勢を多く学んだようです。ある時、その作曲家が彼に「田中君の歌は、優しいんだよね。」「いいえ、僕は優しくありません。自分のことしか考えていません。」「そう言えるのが、優しい証拠だよ。」  
長い音楽人生、まだまだ多くの方々にお世話になりました。ご指導いただきました。最後にありがとうございました。京女にご縁があり、お世話になるようになってから私の教員としての姿勢は、次の言葉に尽きます。

《他人に教える そのように 自己をととのえ 他人をもみちびく まこと自己こそ御しがた》〔法句経159〕  
（ボヘミアンラプソディー）を観た折の涙の意味、少しは理解していただけでしょか。



たとはば牛より乳を出す、乳より酪を出す、酪より生蘇を出す、生蘇より熟蘇を出す、熟蘇より醍醐を出す。醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みな除る。

（涅槃經）

（西義人）

（竹本 了悟）

（西義人）

## 法のことば

たとはば牛より乳を出す、乳より酪を出す、酪より生蘇を出す、生蘇より熟蘇を出す、熟蘇より醍醐を出す。醍醐最上なり。もし服することあるものは、衆病みな除る。

（涅槃經）

（西義人）

（竹本 了悟）

（西義人）

### お知らせ

◆卒業回生の合同礼拝◆  
卒業回生のみなさんは本学での最後の礼拝として「合同礼拝」を行います。  
日 時 令和2年11月18日(水) 15:00~16:30  
場 所 B501教室  
記念講演 「宗教から世界を見る」 池上 彰氏(ジャーナリスト)  
・必ずお念珠を持参してください。  
・参加者には卒業後にもずっと使っていただけるオリジナルの記念品があります。

◆仏前成人式◆  
成人のお祝いに本学礼拝堂で仏前成人式を行います。記念講演では、英月氏にお越しいただきます。  
日 時 令和2年12月12日(土) 13:00~ ※12:10から受付を開始します。 ※12:30までに入場してください。  
場 所 礼拝堂(A校舎5階)・学生食堂(A校舎地階)  
記念講演 「あなたが、あなたのままで輝く~仏前成人式によせて~」 英月 氏(真宗佛光寺派長谷山北院 大行寺 住職)  
・先着100名です。 ・必ずお念珠を持参してください。  
◆申込などの詳細は京女ポータルまたは宗教教育センター(L校舎3階)までご確認ください。  
※なお、今後の国内や本学の状況によりましては、開催が取り止めとなる場合があります。その場合は、京女ポータルにてお知らせします。

シリーズ 智慧の蔵 33

『図解でわかる ホモ・サピエンスの秘密』  
インフォビジュアル研究所・著 太田出版 二〇一七年

皆さんは私たち人間について「特別な存在」だと感じたことはあるでしょうか？ 確かに、他の生物に比べてあまりにも多様な複雑な社会を営み、繁栄をほしいるままに地球の上に君臨しています。

地球が誕生して約46億年、最初の生命体が現れたのは、約38億年前。海中に生まれた単純な生命が、進化を重ねて陸に上がるまでに要した年月は、実に30億年以上。それに比べて、サルとヒトが分かれたのは、最初の人類が登場したのは、ほんの700万~600万年前。そして私たちホモ・サピエンスの歴史はたったの20万年です。地球46億年の歴史を一年として換算すると20万年はわずか23分です。さらに、オリゴセントに文明が起ってから数千年

ですから、加速度的に変化し続けています。何故、あらゆる生物のなかでホモ・サピエンスだけが、短時間で類まれなる進化の道を歩むことができたのでしょうか？

本書では「サピエンス全史上下」(ユヴァル・ノア・ハラリ著)で示される「認知革命」こそがその駆動力であると示されています。「認知革命」とは、想像の世界を言葉で語り、その虚構の物語を集団で共有する能力を持てるようになった、ホモ・サピエンスの脳だけが獲得した力です。その進化の歴史を紐解いてみると、狩猟採集生活から農業革命が起った背景に虚構の物語としての宗教があったこと、暴力の避難場所として想像の共同体として、お金や株式会社、戦争までもがこの想像の産物だと言うのです。

私たち人類「ホモ・サピエンス」とは、一体全体何者なのか？ そして「幸せ」とは何か？ 大学で学ぶ様々な事の大前提として、いま私たちが生きるこの世界の歴史とその秘密について、ぜひ知っておいていただきたいと考えています。図解で示されていることで、イメージを共有(まさにホモ・サピエンスに独自の能力である想像/イメージを活かした本!)しながら、この世界を俯瞰して眺めることができます。

さらに深く考えてみたい方には、ぜひ「サピエンス全史 上下」を手にとっていただくと、よりこの世界と人類の本質を知ることができると思います。

（竹本 了悟）